

「オートポイエーシス」って何? ～ある大学教員と大学院生との会話から

八巻 秀 (駒澤大学文学部心理学科)・廣瀬弘文・山崎 朱乃 (駒澤大学大学院人文科学研究科)

What is Autopoiesis ? : From the conversation by a professor and graduate students

Shuu Yamaki (*Department of Psychology, Faculty Letters, Komazawa University*)

Hirohumi Hirose・Akeno Yamazaki (*Graduate Division of Arts and sciences(II), The Graduate school, Komazawa University*)

ある日の八巻研究室：「オートポイエーシス論」を巡っての会話のはじまり

八巻 (以下、八)：やあ～いらっしゃい。今日は何か訊きたいことがあるんだって？

山崎 (以下、山)：そうなんです。先生が授業中に時々おっしゃっている「オートポイエーシス」について、あらためてお話をお聞きしたいなと思って・・・

廣瀬 (以下、広)：あの～オートポイエーシスって、いわゆる「システム論」の一種だということは、調べてわかったんですが、あとは本を読んでも何のことかさっぱり分からなくて・・・先生、オートポイエーシスって、どんなシステムなんですか？

山：それにオートポイエーシスって、私達が学んでいる臨床心理学や心理臨床に何か役立つことなんですか？

八：そうですね。実は、私もまだ勉強中なんだけど、1つずつ考えながら、お話ししていきましょか～。「オートポイエーシス (Autopoiesis)」とは、なかなか面白い「1つのものの見方・考え方」と言っているかな？ 歴史的には、チリの神経生理学者のウンベルト・マトゥラーナが1972年に発表したシステム論で、ギリシャ語で自己を表す「アウトス」と、創出・産出・制作を意味する「ポイエーシス」を組み合わせ、マトゥラーナがこの言葉を作ったんだ。日本語では「自己産出」とか「自己創出」とか訳されていることもあるよ。もともとは生命を定義するための生物学の理論として提唱したものなんだ。つまり、マトゥラーナは「生命はオートポイエーシス・システムである」と考えたんだね。

広：ふ～ん、生物学の理論が心理臨床とどう関係あるんですか？

八：もう少し説明させてね。確かにそれだけだと、単なる生物学の理論にすぎないんだけど、1980年代にドイツの社会学者ニクラス・ルーマンが、この理論を社会学に応用して、独創的な「社会システム論」を発表したんだ。これは社会をオートポイエーシス・システムとして考察したもので、これをきっかけに様々なものがオートポイエーシス・システムとして見なされるようになって、いろいろな分野でオートポイエーシス論が応用されるようになってきているんだよ。

山：いろいろというのは、どんな分野で応用されているんですか？

八：そうだね～生物学や社会学を始めとして、法学や文芸批評・精神医学・心理学など、自然科学系・人文科学系を問わず、様々な分野で応用されているんだよ。だから、オートポイエーシス論は、ある意味では学際的なものの見方、思考の大きな枠組みと考えて良いかな？

広：そうなんですか～ちなみにオートポイエーシス論は、日本にはいつ頃伝わったんですか？

八：日本に本格的に導入されたのは、1995年に出版された河本英夫氏の「オートポイエーシスー第三世代システム」(青土社)が最初と言っているかな？ それから何冊か日本人による本は出ているよ。

広：あ～その本読みました。正直・・・何を言っているのかさっぱり分からなかったです(笑)。

八：いきなりその本でオートポイエーシスを勉強するのは、ちょっと難しいかもしれないね。少し前に出た「オートポイエーシスの世界ー新しい世界の見方」(近代文芸社)という山下和也氏が書いた本は、初学者向けで少し読みやすいかもしれないよ。

オートポイエーシス・システムとは「働き」

山：先生、オートポイエーシスって、具体的にどういうことなんですか？ ぜひ分かりやすく教えて下さい。

八：じゃ～まず、オートポイエーシスを理解するためのキーワードを1つ紹介しますね。

「産出されたものがあれば、必ずそれを産出した働きがある」

これは、マトゥラーナが掲げた標語（「言われたことのすべてには、それを言った誰かがいる」）を、オートポイエーシス一般向けに山下氏が拡大解釈して示したものだ。何か生れてくるものがあるということは、その背後に必ずそれを生み出す「働き」が存在しているはず、最も簡単に言えば、この「働き」のことをオートポイエーシス・システムと呼んでいるんだ^(解説1)。

【解説1】オートポイエーシス・システムの定義を2つ紹介しておく。

「オートポイエーシス・システムとは、その構造のみならず、システムがそれから成る構成素をも、まさにこの構成素自身のネットワークにおいて産出するシステムである」（ルーマン, 2007）

「オートポイエーシス・システムとは、産出物による作動基礎づけ関係によって連鎖する産出プロセスのネットワーク状の連鎖の自己完結的な閉域である。閉域形成に参与する産出物を構成素と呼ぶ」（山下, 2010）

広：生まれてくるものとか、生み出すって、何を生み出すんですか？

八：生み出されたもの（＝産出物）は、いろいろなものを考えて良いというのが、オートポイエーシスの面白さなんだ。例えば、鳥だったら卵、哺乳動物なら子どもを産みますよね。それは鳥や哺乳動物の中で、オートポイエーシス・システムが働いているからと考えるわけ。その際、卵や子どもが産出物だね。

山：社会学者のルーマンが言った社会システムでは、何が産出物なんですか？

八：ルーマンは、オートポイエーシス的な社会システムでは、言葉の発話や行為などの「コミュニケーション」が、産出されている構成素^(解説2)と考えるんだ。

【解説2】産出物と構成素の関係について： 定義に「閉域形成に参与する産出物を構成素と呼ぶ」と書かれているように、オートポイエーシス・システムは産出プロセスが「閉域」になった時点で成り立つと考えるため、その産出物はオートポイエーシス・システムになった時点で、はじめて「構成素 (component)」と呼ばれる。産出プロセスが閉じていなければ、オートポイエーシス・システムとは言えず、産出されているものを構成素とは呼ばない。

広：ふ～ん、コミュニケーションが産出されるんですか？

八：例えば、今、廣瀬君の質問を受けて私が答えているというこの状況も「廣瀬君の質問 (コミュニケーション)」という産出したものを受けて、八巻が「答え (コミュニケーション)」を産出していると考え。コミュニケーションが連鎖しながら次々と生まれているよね。だから、この状況でオートポイエーシスが働いているかもしれない。そして、それがオートポイエーシス・システムであるならば、マトゥラーナが示したオートポイエーシスの4つの基本的性質を満たしているんだ。

広：そうなんですか～そう言えば、本に書いてあったなあ～オートポイエーシス・システムの特徴として、「自律性」と「個性」と「単位体としての境界の自己決定」と「入力・出力の不在」の4つが挙げられていたけれど、そのことですよ？ これらも読んでもやっぱり意味が分からなかった。すみませんおバカで(笑)

八：いや～私もすぐには分からなかったよ。この4つの性質についてのマトゥラーナや河本氏の解説は、シンプルすぎてわかりにくくて、一般的にも多くの誤解を招いているらしいから、私なりに理解したところを解説してみましようね。

広・山：お願いしま～す。

オートポイエーシス・システムの4つの性質 その1:「入力・出力の不在」

八:では、オートポイエーシス・システムの基本性質:①「自律性」、②「個性」、③「単位体としての境界の自己決定」、④「入力・出力の不在」の4つの中から、まず最初に、④の「入力・出力の不在」から説明しましょう。この性質は、オートポイエーシスにとっては決定的な性質と言われている、河本氏が「オートポイエーシスの論理は、既存の理論に比べてこの点がとても異様なので、この点を中心にしてシステムの全貌をイメージすることになる」と述べて、オートポイエーシスの**特異性**として強調しているんだ。つまり、**最もオートポイエーシスらしい性質**と言えるかな?

広:本を読んでいても、まあ、最初の3つの性質は、何となく分かるような感じですが、この「入力・出力の不在」については、本当にさっぱり分からない。

八:この性質が、オートポイエーシス論に対する誤解の大半を生んでいるようだね。生命システムで考えてみると、確かに動物は一見、食べ物・水などを摂取して(入力)、排泄物を出している(出力)から、入力・出力はあるように思える。だけれども、オートポイエーシス・システムとは「働き(=作動)」そのもののシステムのことだから、動物そのものというより、その背後にある動物を生かしている「働き(=システム)」を見ていこうとすることが大事なんだよ。

山:動物を生かしている「働き」を見ることが、生命のオートポイエーシスを見ようとしていること?

八:そうなんだ。オートポイエーシス・システムが働いている(作動している)時は、その外側からは働き方を直接的に変化させることはできないし、その働きが外部に直接影響を及ぼすこともない、そういう意味で、オートポイエーシス・システムは閉じていて自己完結しているとも言える。オートポイエーシス・システムが作動している限り、入力も出力もないとはそう言う意味なんだよ。

広:ちょっと、ついていけませ〜ん(笑)。「働き」を変化させるというのは?

八:極端な例は動物を殺すこと。生命システムにとっての死は、オートポイエーシス・システムの作動が止まるあるいは消滅することなんだ。オートポイエーシスが消失するような「破壊的影響」^(解説3)は、外部(環境)からの直接的影響と言えるでしょうね。この「破壊的影響」以外のことについては、生命の「働き」に対して、食物摂取などは間接的に影響を及ぼしている^(解説4)けれど、直接的影響・変化はないと考えて良い。このことが「働き」に対しては入力・出力もないというオートポイエーシス・システムの性質を表しているんだ。

山:う〜ん、「働き」だけをイメージするって難しいですね。

【解説3】オートポイエーシス・システムが維持できない存続不可能な(あるいは消失する)ような、「システム」と「環境」の相互作用を、マトウラーナは「破壊的相互作用」と呼び、山下は「破壊的影響」と呼んでいる。

【解説4】オートポイエーシス・システムは、作動に自分の「環境」の一部(構成素になる元)を巻き込んで、自分の構成素として産出するシステムである。「環境」から言えば、システムの作動に巻き込まれていることになり、こうした事態を「相互浸透(Interpenetration)」と呼ぶ。相互浸透はシステムと環境の間接的な影響関係を示している。

ある催眠臨床の一場面での出来事から

八:ここで少し具体的なお話をしますね。私がこの「入力・出力の不在」で思い出す、ある臨床場面があるんだ。以前、ちょっと論文にも書いたんだけど(八巻, 2006)、それをお話ししましょうか?

広・山:ぜひ、お願いします!

八:それは、私が臨床心理士として駆け出しの頃、そう20年近く前かなあ。師匠だったS先生の精神科クリニックに私が勤務していて、S先生の催眠療法に陪席していた時のことでした。S先生は催眠療法家でもある精神科医で、それまでも何度も私はS先生の催眠療法に陪席していたんだ。ある日のセッションで、S先生がク

ライエントの男性を催眠誘導して、だんだん催眠トランス状態に入っていく途中でした。突然、クリニックの近所で救急車の大きなサイレン音が鳴り始めたんだ。

山：突然のサイレン音ですか？ そりゃクライアントは催眠から覚めちゃうでしょうね～。

八：そうなんだ。その音はとても大きくて、私も陪席で聞きながら「うるさいなあ～これじゃクライアントが催眠から覚めるだろなあ」と思っていました。ところが、その音が聞こえているであろうS先生が、まったく動じずに、平然とそして静かにクライアントに次のように語りかけたんですね。

「・・・今、サイレンの音が聞こえているかもしれません。その音が聞こえてくればくるほど、さらにウツトリとしてきます・・・」

すると、確かにどんどんクライアントの頭がすう～つと下がってきて、さらに深くトランスに入っていく様子だった。クライアントもサイレンの音が全く気になっていない感じでしたね。

広：う～ん、さすが！名人芸ですね～

八：そう。当時、その直後は、さすがS先生、催眠うまいな～と私も思ったのね。ただ、そのセッションの後で、自分の中に「なぜS先生は、まったく気にせず自然に、サイレンの音を催眠誘導に取り入れられたんだろう？」という考えが湧いてきたんだ。当時、S先生に直接そのことを聞いたと思うんだけど、S先生はハッキリとは答えてくれなかったかな～。ちなみに、エリクソン催眠の理論では、そのような方法を「**利用法（＝ユーティライゼーション）**」と言って、治療場面に持ち込まれたものを利用して、催眠誘導するという説明があるんですが、私はその理論を知った時でも全然納得いかなかった。

山：え～どうしてですか？

八：「利用法」という理論だと、S先生の頭の中に利用法という考え方が元々あって、催眠誘導している最中に、突然サイレンの音が聞こえても、これ利用しようって考えて行うということでしょう？ でも、このサイレンの音というハプニングでとっさにそうできるものなのか？ トレーニングや経験だけの問題なのか？

広：う～ん、どうですかね～？

八：S先生のその時の表情とか思い出してみても、ホントに動じてない。自然にすうつとその言葉が出てきている。なんでかなあ～とずっと思ってたんです。それで10年くらい前かなあ～このオートポイエーシスの本を初めて読んで、「入力も出力もない」という性質を知った時に、「あ～これかもしれない」と思ったのね。

山：ふ～ん、何がですか？

「トランス空間」がオートポイエーシス・システムになっている？

八：どういうことかという、その時に私が考えた仮説は、催眠トランスの状態とは、クライアントとセラピストの間に「トランス空間」というものができていて、その「トランス空間がオートポイエーシス・システムになっている」んじゃないか、と考えたんだ。つまり、催眠誘導しながらトランス空間が出来上がってくると、そこにオートポイエーシス性が働く。そうすると、オートポイエーシスっていうのは、入力も出力もなくて、その中で産出の働きを続けているものだから、このS先生とクライアントとのオートポイエーシス的なトランス空間では、生まれてくるものしか存在しない。

広：うん？トランス空間では何が生まれているんですか？

八：例えば「サイレンの音」も、トランス空間の中で生まれてきたと考えてみる。つまり、トランス空間の中では、サイレンの音さえも外から聞こえてきたとS先生は思わなかったんじゃないか。もちろんクライアントもね。つまり、オートポイエーシス・システムになっているトランス空間では、サイレンの音はその場で生まれてきたものとS先生とクライアントは捉えているんじゃないかと考えたんです。

山：う～ん。じゃ～S先生の「その音が聞こえてくればくるほど～」という言葉は、サイレンの音が外から聞こえてきたと感じなかったから、言えたセリフですか？

八：そう。催眠誘導プロセスの中で（オートポイエーシスが働いているトランス空間で）生まれてるんだから、生まれてるもの（＝サイレンの音）にそのまま声をかければ良い。そんな感じで、自然にS先生の「その音が

聞こえてくればくるほど～」という言葉もまた生まれてきたんじゃないか。だから、その催眠トランス空間の中で、オートポイエーシスが働き始めてれば、何が起こっても自然にセラピストは振る舞うようになっているし、クライアントもそういうふうになってくる。そういうふうな動き・行為になっちゃう。こんな状況は、オートポイエーシス・システムの入力・出力もないという性質を物語っているんじゃないかと考えているんだ。

広：じゃ～利用してとかじゃなくって、その言葉が生まれてきた？

八：そう考えてみようと言うわけだ！ おっと、思わず熱く語ってしまってゴメンネ・ゴメンネ～（笑）

山：いや、いつものことですから、大丈夫です（笑）

「システム自身にとっての視点」について

八：ちなみに「利用法」という考え方は、「システムの外側からの視点」に立っている考え方と言って良いかな？ 外側からサイレンの音が聞こえてくる（のを利用する）と考えると、陪席していた私のように「うるさいな～」とか「もう催眠はできない」とか思ってしまうよね～。逆にシステムの内部あるいは「システム自身の視点」で考えると、そんな邪魔だなんて思わないどころか、その催眠誘導という作動に添った言葉が生まれてくる。だから自然にその次の言葉が出てくる。そんな言葉は名人芸ではなくて、催眠誘導しながらオートポイエーシスが働き始めている中では、自然にそういうふう振る舞えるようになっちゃう。と考えるのが「入力も出力もない」ということだし、オートポイエーシス・システムの自身にとっての視点というものの見方なんだ。こんなふうに、オートポイエーシス論は「システム自身にとっての視点」という新しい視点を提供してくれるんだ。

山：う～ん、その「システム自身にとっての視点」というのを、もう少し分かりやすくお願いします。

八：「システム自身にとっての視点」ということで、マトゥラーナが「飛行機のパイロット」の喩え話を言っているんだ。ちょっと長いけどマトゥラーナが書いた「知恵の樹」（筑摩書房 1997年）から引用してみるね。

「生命システムで生じていることは、飛行機で生じていることに似ている。パイロットは外界に出ることは許されず、計器に示された数値をコントロールするという機能しか行わない。パイロットの仕事は、計器のさまざまな数値を読み、あらかじめ決められた航路ないし、計器から導かれる航路にしたがって、進路を確定していくことである。パイロットが機外に降り立つと、夜間の見事な飛行や着陸を友人からほめられて当惑する。というのもパイロットが行ったことと言えば計器の読みを一定限度内に維持することであり、そこでの仕事は友人(観察者)が記述し表そうとしている行為とはまるで異なっているからである」(p.231)

どう？ このパイロットの視点が、システム自身にとっての視点と言っているんだよ。

広：う～ん、分かるような、分からないような…

八：このパイロットがオートポイエーシス・システムね。オートポイエーシス論の最大の特徴は、このシステム自身にとっての視点を常に考慮に入れることにあるんだ。すぐには分からなくて良いけれど、このパイロットの喩え話は、オートポイエーシス・システムのいろいろな性質も物語っているから、オートポイエーシス理解のために、事あるごとに思い出すと良い話だね。

オートポイエーシス・システムの4つの性質 その2：「個性」と「自律性」

広：先生！性質といえば、残りの基本的性質①～③の3つについて、まだ説明していないですよ。

八：ああ、そうだったね。④の「入力・出力の不在」の次は、②の「個性」についてお話ししましょう。個性というと、固体と間違えて、つい物的に考えがちなのですが、オートポイエーシス・システムは「働き」のことでしたから、物的なものではなく、動きや働きなどの作動を本質としていました。つまり「個性」の性質とは「働きが個性になっている」ということです

山：う～ん、やっぱりイメージしにくいですね～すみませ～ん、想像力不足で（笑）

八：いやいや、哲学ではね、「個体」の意味は、「個々に独立して存在し、それ以上分割されればそのものの固有

性を失ってしまう統一性」となっている。つまり「分けられないもの」という意味。そう考えると、「**個性性**」とは、「**オートポイエーシス・システムは、それ以上分割できない**」という性質のことを指している。

山：ふむふむ。生命システムで考えると、生命体を無理矢理2つに分けようとすれば、結局死んでしまうことなどは、その個性性の例になりますか？

八：そう思うね。生命における死とは、オートポイエーシスを維持できなくなった、つまりオートポイエーシス・システムが消失したことによると考えるんだよね。良いかな？ では、次に①の「**自律性**」についてお話ししますね。これは、**システムの作動はシステム自身が決めている、だからシステムを外部からコントロールすることはできない**ということですよ。

広：それはベイトソン（1990）が「石をけつたらどう転がるか予測可能だが、犬をけつたらどうなるかは予測不能」と言ったことと同じ意味ですか？

八：その通り。まあ考えてみれば、当たり前前の例えだけれど、犬のオートポイエーシス・システムは自律性があることの良い例えだね。この性質はイメージしやすいかな？

山：生命システムでは「自律性」は考えやすいです。でも、もし社会システムで考えると・・・どうなんだろう？

八：ルーマンは、オートポイエーシス的な社会システムの構成要素は、「**コミュニケーション**」であると言っていましたよね？ 「**コミュニケーション**」と言ってもいろんな要素があるから、その中でも特に「**会話**」で考えてみると良いかもね。例えば、友だち同士でワイワイと話しているうちに、お互いに思ってもみない方向に話題が展開・発展することはありますか？ そのような現象もこの「**自律性**」を物語っているのかもしれないね。

山：なるほど！ 私も鬼塚先輩と話していると、そうなること良くあります！

八：君たち二人はホント仲が良いね～。オートポイエーティックな関係かな？（笑）

オートポイエーシス・システムの4つの性質 その3：「**単位体としての境界の自己決定**」

八：では、どんどん行きましょう。性質の残りは③の「**単位体としての境界の自己決定**」。これは**システム自身が自分と自分でないものの区別（＝境界）をつける**という性質。オートポイエーシス・システムとは「働き」だから常に動いている。動きながら閉じた領域ができた時が、オートポイエーシス・システムが出来上がる。だから「**動きながら閉じて、閉じながら動いている**」と考えて良い。

広：そうか、オートポイエーシス・システムは閉じているんですね。

八：閉じているからこそ、最初に説明した「**入力も出力もない**」という性質が言えるんだ。そうやって、閉じながら動いていること自体が、システムとそれ以外のものを区別＝境界を作っていることになる。ちなみに、**区別されたシステム以外のものをオートポイエーシス論では「環境」と名付けています**。だから「**システム自身によってシステムと環境を分けている**」と言っても良い。単位体については、個体とほぼ同じ意味のようですね。オートポイエーシス・システムに部分はないということ。

山：ふ～ん。オートポイエーシス・システムによって、世界は「システム」と「環境」に分かれるんですか。

八：ルーマンがまさにそう言っているよ。オートポイエーシス・システムが「**環境**」と分離する以前の状態を「**世界**」と呼んでいるんだ。でも、オートポイエーシス論での「**環境**」も「**世界**」も一般的に使われている言葉とはちょっと違う意味を持っているから、本当は別の言葉を使った方が良いと思うんだけどね・・・。

広：やっぱり、オートポイエーシス・システムが閉じているというのが分からないな～じゃあ、ルーマンが言っているようなオートポイエーシス・システムである社会システムも閉じているんですか？

八：そうなんだ。これも具体的に考えてみると、さっきも言ったように**この場もオートポイエーシス・システムになっているかもしれないよ？** だってこの3人が、今までそれぞれ連鎖的にコミュニケーションを産み出し続けているでしょう？ そして3人だけで会話し続けている。コミュニケーションの産出はこの3人以外では起こっていない。つまり、この場で閉じているよね？ だから、この場はオートポイエーシスの社会システムが作動していると考えて良い条件はそろっている。ここで今カウンセリングをしているわけではないんだけど、このような**2人以上の会話の空間をオートポイエーシス・システムとして考えられることが、**

心理臨床実践にオートポイエーシスの考え方を適応させる可能性が秘められていると期待しているんだ。ただ、これではまだ荒っぽい捉え方だから、もう少し細かく考えていく必要があるけどね。

オートポイエーシスとナラティブ・アプローチ

山：先生はなぜ心理臨床実践にオートポイエーシスの考え方を取り入れようとしているんですか？

八：私がもう1つ関心を持っているナラティブ・アプローチとの関連からかな？ ナラティブ・アプローチのことは知っているよね？

広：はい、家族療法なんかでよく言われている「社会構成主義^(解説5)に基づくセラピーの一種」のことでしょ？

八：そうだね。もう今では家族療法だけでなく、看護や福祉、あるいは教育の領域でもナラティブについて論じられているので、今はナラティブ・セラピーじゃなくて、ナラティブ・アプローチ^(解説6)と言われているんだよ。

【解説5】社会構成主義 (social constructionism)： 1980年代に、社会心理学者ガーゲンによって心理臨床領域に提示された認識論。現代の家族療法の世界に最も浸透している。「現実社会的に構成される」として、現実、観察者と切り離された存在ではなく、主観的に創り上げられ、他者と共有することで、その確かさを帯びてくる。現実、コミュニケーション(社会の中の人と人との相互交流)の中で構成されると考える。

【解説6】ナラティブ・アプローチ (narrative approach)： 斎藤清二は、「ナラティブと医療」(金剛出版)の中で、「医療におけるナラティブ・アプローチ」というものを以下の7つの次元にカテゴライズしている。①医療人類学、②家族療法におけるナラティブ・アプローチ、③AW フランクの物語論、④精神分析における物語解釈、⑤河合隼雄の物語論、⑥質的研究としてのナラティブ・アプローチ、⑦ナラティブ・ベイスト・メディスン (NBIM)。これらはあくまでも医療領域でのカテゴリーであり、他にも看護、福祉などの領域などでもナラティブ・アプローチは論じられている。

山：そのナラティブ・アプローチとオートポイエーシスが、どう関係があるんですか？

八：先日、ナラティブ・アプローチのワークショップ(高橋ら, 2009)に参加して、高橋規子氏(心理技術研究所)が見事にナラティブ・アプローチをしているビデオを見たんだけど、うまくいっているナラティブ・アプローチは、多くの場合、会話している者同士の間に新しい「ナラティブ」が生まれているんだよね。高橋氏もそのワークショップで「“ナラティブ”は『語る』という行為と『語られたもの』という行為の産物の両方を同時に含意する用語である」とも説明しているんだ。「ナラティブ」は産物なんだよね。

山：ナラティブ・アプローチでは、その「ナラティブ」が生まれているんですか？

八：そう、生れている、「ナラティブ」が産出されているんだ。ここで、最初に話したオートポイエーシスを理解するためのキーワードを思い出してほしいんだ。「産出されたものがあれば、必ずそれを産出した働きがある」

広：そうか、「ナラティブ」が産出されているなら、それを産出した「働き」がある。

八：そうなんだ！ 人と人との間で「ナラティブ」を産出する働きとしてのオートポイエーシスがあるとなれば、ナラティブ・アプローチがうまく展開していく上で、オートポイエーシスの働きが絡んでいるんじゃないか、それを考えていくと・・・まあ、今日はここまでにしましょう。

山：え～！！良いところなのに～！

そろそろ終わりにしましょうか

八：もう時間がなくなったからね～ いや～ペラペラ何か一方的にお話ししてしまった感じだけど、お二人が最初に聞いたかったことに、ちゃんと答えられているかな？

広：う～ん、前よりはだいぶオートポイエーシスのイメージがつかめてきたかな～？

八：オートポイエーシス論のコツをつかむためのヒントは、山下氏が掲げてくれた標語「産出されたものがあれば必ずそれを産出した働きがある」を常に念頭に置いておくこと。産出されたと言えるものに気づいたら、すかさず、それを産出した働きを探してみることで、山下氏もブログ(山下, 2008)で強調しているよ。

山：そうなんです。ただ、そのオートポイエーシスの考え方が、どのように心理臨床実践や研究に役に立つのかは、まだ・・・

八：そうだね。今回はまだ入口部分くらいしかお話していませんね。今日はオートポイエーシスの基本的な性質といった基礎の部分をおさらいした感じかな？ただ、その基本をおさえていないと、さっきも言ったように誤解したままで考えてしまうことになるから、お話のはじめとしてはこれで良いのかもしれないね。

広：ちなみに、これまで臨床心理学の世界ではオートポイエーシスはどう扱われてきたんですか？

八：やはり家族療法の世界で論じる人は多かったね。本として出ているのは、私が知る限りでは、十島先生(志學館大学)と吉川先生(龍谷大学)がオートポイエーシスと心理臨床実践とを結びつけたものを書いているよ。後で本を見せてあげましょうね。でも、オートポイエーシスはもっと臨床心理学において議論されて良い考え方じゃないかと思うね。どう？一緒に研究してみない？

山：う～ん、ちょっと考えさせて下さい。

広：修論で書くにはちょっと・・・

八：ハハハッ～ちょっと敬遠されちゃったかな～？まあ、私もポチポチとこれからもオートポイエーシスに取り組んでいくつもりだから、また続きが聞きたかったら、声をかけて下さいね。じゃ～お疲れ様！

《引用文献》

- 河本英夫「オートポイエーシスー第三世代システム」青土社 1995年
グレゴリー・ベイトソン「精神の生態学」佐藤良明 訳 思索社 1990年
ニコラス・ルーマン「ポストヒューマンの人間論」村上淳一 訳 東京大学出版会 2007年
高橋規子／八巻 秀によるワークショップ「そのとき、ナラティヴ・セラピストは何を考えているのか？」 2009年12月13日 ルミエール府中にて その中での講義「“ナラティヴ”とはどんなことだろう」より
十島擁蔵「家族システム援助論」ナカニシヤ出版 2001年
八巻 秀 「関係性」という視点から見た催眠臨床：トランス空間とオートポイエーシス. 催眠学研究, 49(2), 28-35. 2006年
山下和也「オートポイエーシスの世界ー新しい世界の見方」近代文芸社 2004年
山下和也「オートポイエーシス論入門」ミネルヴァ書房 2010年
山下和也 ブログ「オートポイエーシスの黒板」 2008年4月17日の記事より
吉川 悟「セラピーをスリムにする！：ブリーフセラピー入門」金剛出版 2004年
ウンベルト・マトゥラーナ／フランシスコ・ヴァレラ「知恵の樹」菅啓次郎訳 筑摩書房 1997年